『比較民俗研究』8．1993／9

“竜の眼” －資料と短信－

北京周辺における産育習俗の調査報告

李永※

I　三家店における調査(1992年4月20,21,23日)

三家店村の概況：北京の西郊外，市区と門頭溝鉱山区の真ん中に位置する。村は東と西へ細長く延びて，一筋の通りの両側に家々が建てられている。村は東街，中街，西街と分けられている。村の北は山に臨み，南には河に面している。東は交通路に接し，村の入り口に大きな柱が二つあり，上に横の梁がないが，鳥居のような格好をしている。西の外れに竜王廟がある。

元々農業を生業とする家が多かったそうであるが，後は，鉱山関係の仕事と商売をする家が多くを占めてきた。交通の要にあるためか，村全体に農業のにおいが薄く，昔の商店街の面影がまだ残っている。

三家店には竜王廟，三官廟，馬王廟，二郎廟，東庵廟，樹神廟（財神廟あるいは薬王廟とも言う）の六つある。東庵廟は尼の寺だったが，今は村役所に使われている。現在は完全に残っているのは竜王廟だけである。あとは他に使われていたり壊れてしまったりしている。調査は主に中街で行った。

おじいさんたちの話によると，村民の多くは200年余り前に山西の「大槐樹」という所から来た。村の習慣としては，外来の者をいつも助けて村に安住させようとする風尚があり，その為に，よく外来者の家が早く豊かになるのである。その理由を，元来の家家の人たちが気にして，財神が村の外に建てられているから，「財源外流」であると思って，その財神を村の中に移したとのことである。

※筑波大学大学院　地域研究科終了生

話者：王徳華さん。但し，項目によっては，他の話者から聞いた断片的な話を加えることにする。

78才である。実家と婚家は皆野菜農業に従事。村に土地が少ない為に，現在でも，人民公社の土地で働いている。（ほとんどの地域では自分の土地を持つようになった。）

60年前にこの地にお嫁に来た。五人の子どもがいる。

子授け祈願　昔，結婚してすぐに子どもができる人が少なかった。（三年の内に妊娠する人が少なかった）そのため，子授け祈願がさかんであった。子どもが無い場合は，奶奶廟に鍋娃娃を盗んでいく。それに鎖を飾り、藍の色の糸で三つの銅銭を通し首に掛ける。そして「炕」のむしろの下に置き，毎日本当の子どもを育てるようにご飯を食べさせるのである。（ご飯を食べさせる真似をし，ご飯粒をその人形の唇につける）。もしその後子どもが出来たら，その鍋娃娃を返さなければならない。返す場所は村の辻である。

＊奶奶廟は村の北の山の裾にあり，二郎神の後ろに娘娘神がまつられていた。現在は村の中学校として使われ，廟は学校の教師の宿舎となっている。

子授けの方法としては他にふたつある。それは一つしか実らない木の実を食べること。もう一つは人の子どもをもらうこと。それによって自分の子どもを「圧」し，招く役割をしてもらう。この方法は，かなり効くそうで，何人かは確かに子供ができたとのこと。いったん自分の子供が生まれても，もらった子に悪い取扱いをしては行けない。そうでないと，自分の生んだ子供は長く生きられない。

産所　婚家の家。

必ず婚家で産むことを話者達は強調された。

産室　普段の寝室。その期間（男の子は30日で，女の子は40日）は「暗房」とよばれる。お産の時に「暗房」のドアの暖簾に男の子の場合に赤い布

切れと高粱で作った剣の形を飾る。女の子の場合には，ただ赤い布切れだけを飾る。お産は暗室の炕と呼ばれるベットで産む。

＊「炕」は普通部屋の半分程を占め，土で作られ，大所の籠とつながって，食事を作ると「炕」は暖められる。

出産　夫及び男が「暗房」に入っていけない。

＊厳しい家では30日間，夫が「暗房」にはっいてはいけない。

産湯　産婆がやる。産んだ当日はやらないが，三日目に一回だけやる。産湯を捨てる場所は別に気を使わなかった。

へそのお　嬰児の額までおよぶ長さの所から切り，そして，赤ちゃんの擧程の大きな結びをする。（すごく臭いと言いながら話者が嫌がる表情をした。）乾いて，落ちた部分を包んでしまったが，後にどこかに捨ててしまった。

えな　産婆あるいは夫が木の下に深く埋めた。

＊他の話者によると，通りに埋めることもある。人に踏まれることによって，丈夫で育ち，出世できると信じている。

食事　三日間以内は粟のお粥，黒い砂糖とくるみ。その後，「片湯」などの麺食。

産神　ある家族は夫が鉱山で働くが，妻の出産の折，一塊の石炭を板に載せて庭に置いた。それで鉱山の神は出産のケガレから避けられるという。（村役所。産の神については皆避けているようである。）

三日目（洗三）　主に実家の親戚（実の母，叔母などの女性）がお産見舞いにくる。必ず毛辺（生地そのまま）のおむつを一つ持ってくる。それに，大豆と瓜醤で作られた「瓜子醤」を持ってくる。

＊「洗三」は子どもが産まれて三日目に子どものためにお湯を浴びせる。産婆さんと実家の参加が目だつ誕生祝い儀式である。

＊「毛辺」は縫わないことで，その象形意味を取り，子ともが果て無しに伸びて成長していく心意が込められている。

＊「瓜子」はGuazuと発音し，中国語の「娃子」（小さな子ども），（「わいわいと泣いている子ども」と「立派な子ども」）と諧音（語呂合せ）している。

三日目（洗三）の日には「添盆」という儀礼を行う。お湯に艾草と槐樹の枝と柳の木の枝を入れる。産婆さんがお湯を浴びせてあげるが，実家の人が盆に中に「銅子」（銅貨のコイン）（札の場合は盆の下に置く），葱（聡明と同じ発音）などを入れる。「洗三」の「添盆」をもって赤ちゃんに「歳数」（年の数）を添加するという意識が潜んでいる。

＊艾草で筆のようなものを作って赤ちゃんの額に灸を作る。（おじいさんたち）

十二日目　実家の人（実の母，兄嫁，おばなど）と産婆さんが来る。その日に実家からお米，麺と肉を五斤ずつ持ってくるほか，赤ちゃんの衣服も持ってくる。

名付け　誰でもいい。（当話者のケースは特定の人にかかわらないようであるが，普通は祖父や父親が名付けてやる。）

満　月　身内の親戚ばかりでなく，知り合い，付き合っている近所の人に来てもらう。当日はご馳走で餃子を作る。赤ちゃん（および産婦）の為に，「捏骨縫」をする。必ず麺食である。

＊金持ちの家では，「満月」の日には「辯大事」（たいしたことを行う）と呼ばれ，大棚を作る。（この地方ではお葬式の時も豊かな家では大棚をつくるそうである。）

多くのお客は赤ちゃんの品物を持ってくる。例えば，腕輪，「長命百歳」という文字のある首鎖などを持ってくる。実家はその日に必ず「福」か「寿」の赤い文字あるいは花模様あるいは単なる赤くて丸い印の付いている大きな饅頭を二つ持って来，産婦を玄関の門に，奥の方に向かって座らせて，それぞれの饅頭を一口食べてもらう。それを「満口」という。

百　日　麺で作った「脖歳」を赤ちゃんの首に掛けて，隣人にそれを少しずつ無くなるまで取ってもらう。

産の忌み　30日目までは家を出てはいけない。知らない人と話をしてはいけない。

初外出　男の子は30日目で，女の子は40日目から

である。(どこに行くかは聞き損じたが，実家に戻る印象がある)

死んだ嬰児の処理

＊当時赤ちゃんの死亡率が非常に高い。死んだ子供の処理は簡単である。「子供が死んだら捨てる」という諺がある。自分か村の貧しい人に頼んで，埋めるか川の原に捨てる。嬰児が連続で死んだとき，捨てる前にその嬰児の真ん中の指先を切る。再び「投胎」をしてくれないような願いである。

産　婆　子どもを産んだ後，ただちにご飯を作ってあげる。自分で食べさせるかあるいは一緒に食べる。三日目の「洗三」，十二日目のお祝いと「満月」の時も呼んでくる。

＊後は「仮のおばあ」となることがある。

＊産婆は「老娘」と呼ばれる。(おじいさん達から)

お産見舞い　三日目，十二日目と満月にお祝いに来る。三日目と十二日目には，主に実家と婚家の親戚とお産婆さんが来る。満月に親戚以外に隣人(や友人)も来る。

＊注意すべきところは親戚と隣人の場合は血のつながりと距離は絶対の基準ではなく，普段の付き合いの程度によるものである。

このような傾向は結婚式とお葬式の場合も同様なようである。

＊持ってきたおみやげは部屋に入る前に必ず開けること。そうで無いと，もし産婦と赤ちゃんが病気になる場合は，それが原因とされる。

仮　親

＊顔の醜い人に頼む。その儀式は辻で子供に鎖を掛けてあげる。(村役所)

＊まだ結婚していない男性に仮に父を頼む。彼が結婚すると，仮の母がひとり出来るという。諺では「仮の父を頼み，仮の母を持つと子供の寿命が長い」(「認乾爹等乾娘，小孩寿命長」)(おじいさんから)。

以上，三家店の産育習俗の紹介をしてきた。

ただし，村の多くは山西の「大槐樹」から来た者であるため，上述した習俗は必ずしもこの地方の元来のものとは思いにくい面もある。それに「大槐樹」とはどこにあるかは村の人達は誰でもはっきり知らない。そのため「大槐樹」地域の習俗も把握できないし，それに三家店の隣接する村の事情についての資料も入っていないため，これらの習俗をこの地域の特徴として断定することは危険である。

三家店の産育習俗について幾つか目だったものがあった。その特徴は次のようである。

1．子授け祈願がさかんである。
2．安産祈願の話は少ない。
3．産における血穢の意識が強い。
4．儀礼のほとんどは嬰児を中心に展開されている。
5．子供観の二重性が強く見られる。
6．人間関係の個人差が目だつ。(結婚式と葬式にも見られる)
7．婚家出産の絶対性。
8．儀礼の多くは諧音(語呂合せ)と関係する。

Ⅱ．小張各庄調査　(1992年4月30日，5月1日)

村の概況：北京の東の郊外に位置し，昔は清王朝の東綾へ行く通路に近い。まとまった小さなむらである。200年程前から4人が山西の「大柳樹」という所から，飢饉を避けここに定住するようになった。そのため，村に名字は「張」と「陳」の二つしかない。昔村に老爺廟があった。昔の生業は農業とむしろ編みであった。

最近の五年間にわたり，ほとんどの家は昔の土の家から煉瓦に変身した。諺では，「東南門不求人」とあり，庭の玄関の方向は南向きでやや東よりのが最も良いということである。東向きの門も良くないが，西向きは「鬼門」と呼ばれ，最悪である。

以下の内容は朱というおばあさんの出産を中心とするライフストリーである。

話者：朱氏さん。76歳。

5才の時に婚約した。実家がかなり裕福の上に，長女であるため，幼い頃から可愛がられていた。

3才から纏足が始まったが，痛みが嫌なので，固く纏いあげなかった。そのために14才の時に，足が大きいので，婚約の家から，小さい足がほしいということで，いきなり固く纏われた。その時の痛みは言いようもなかった。当時の諺では，「不怕醜，不怕笨，就怕脚大支被窩」があった。（醜くても，器用でなくても，大丈夫ですが，一番困るのは布団を支えている足が大きいことです。）

15歳に約10キロ離れた村から嫁に来た。結婚の時の嫁入り道具として，タンス，7セットの陶磁器，金銀の腕輪などがあった。結婚式も華やかだった。八人の担いだ「轎」で婚家に迎えてきたのである。結婚の当日に実家で「轎」に父に抱き上げてもらい，婚家に着いたら「轎」から「全和人」が世話し降りてきた。足が地面を踏まないように，「倒紅絨毯」で「洞房」に入った。「洞房」のドアの内側に鞍を一つ置いてあり，お嫁さんがそれ跨らなければならなかった。「鞍」は「安」と発音が同じ，今後の生活が「平平安安」になるようにという心意である。「洞房」の「炕」に敷いてある布団の四つの角に「花生」（落花生のこと。）「枣子」，「瓜子」が置いてある。「花生」は男の子と女の子も両方混ぜて産むことと発音が同じで，「枣子」は早く産む言葉と諧音し，「瓜子」は「wazi」の発音と同じである。

婚家は五世同堂の大家族である。結婚した三日目から家族の食事をするようでなった。日が出る頃に朝食をする為に，朝の三時頃に起きなければならない。年に婚家から休暇を二回もらえる。6月と冬に20日ほどである。戻る日程が固く決められている。実家にいる間に手仕事を課される。朱氏の場合では，甘えて，実家から人にやってもらった。例えば，一足の靴は120銅貨がかかる。（300の銅貨は一大洋である。一大洋は粉麦を一袋買える。）

夫が一人子のために，余り仕事を真面目にやらなかったし，家の事にも関心が無かった。その代わりに，賭事をやったという。

18歳に長男が生まれ，全部で8人産んだが，生き残ったのは6人であった。35才の時に夫が亡くなり，その後再婚しなかった。

次に主として長男の出産の様子を紹介する。

産　所——婚家である。

産　室——ふだんの寝室である。

場　所——「炕」の暖かい側でむしろを翻って，砂を敷いて生む。砂の上に産婦と産まれた赤ちゃんの体に当たる所しか布を敷いていなかった。周りは砂のままだった。

出　産——部屋にいたのは産婆さんと姑さんだった。夫が部屋に入ってはいけなかった。家によって夫が一か月間その部屋に入る事は許されない

産のしるし——産室のドアのノレンに赤い布切れを掛かる。男女児同様。

へそのお——はさみで半尺ほどの所から切る。残りは結ぶ。乾いて落ちた部分は豚小屋に捨てる。へそのおの結び目は落ちるまで，嫌なにおいがした。

え　な——夫が庭の隅に埋める。「溢奶」の無いように深いほどがいい。えなの口が上に向く。

食　事——三日目までは粟のお粥「紅糖」とくるみ。その後は麺食。「座月子」の間は新鮮なものを食べない事。

＊「座月子」はお産の忌みの期間である。男の子は30日間で，女の子は31日間である。その間には，産婦に様々な禁忌が課せられる。知らない人と話しては行けないとか。

産の湯——産婆さんがやる。使った後のお湯は豚小屋に捨てる。

産の砂——砂は出産の時に使う以外に子どものおむつにも使われる。おむつ袋の中の砂は毎日変える。それらの砂は皆豚小屋に捨てられる。

洗　三——産婆さんと実家の人（母とおば）がお祝いに来る。その日に主に食べ物を持ってくる。例えば，くるみ，卵，飴など。その日に餃子を食べる。

七日目——実家の人と産婆さんに来てもらう。「捏骨縫」の為に餃子を食べる。

十二日目——産婆さんと実家の人に来てもらう。

その日に子どもにお湯を使う。食事は羊と牛肉だけ食べる。産婦の「捏骨縫」の為に，餃子をつくる。

満　月――男の子は30日間で，女の子は31日間である。その日に子どもにお湯を使う。実家の人と産婆さんと友人と隣人に来てもらう。その日から，男が産室であった部屋に入るようになる。その日から赤ちゃんが外に出られるようになる。お祝いの後，産婦と赤ちゃんが「套車」して実家に戻る。ほぼ半月ほど実家で過ごす。

＊「套車」は馬・騾・牛・驢でひく昔の交通用具である。どの動物を使うかはその家の経済的な実力によるものである。

満月の日に，実家から頂に小さく，赤い花を挿してある饅頭を一斗持ってきて，着いたら話をする前に，それを娘である産婦の髪の毛に挿してあげる。そうする事によって，産婦は年を取ると，髪の毛が落ちないということである。

満月に来た客はおみやげは主として品物に変わる。実家が必ず「長命百歳」か「麒麟送子」の文字の付いた「長命鎖」を送る。普通は銀製で，下には黄色い穂が五つ付いている。銀製の手首も実家から送ってもらう。

お産見舞い――「洗三」，七日目，十二日目の折，普通は実家と産婆さんを中心とする女性の客である。男性の客が来ても，産室に入らない。「満月」から男性が入れるようになる。

名付け――姑と夫。長男は「大順頭」，二番目は「二福」，三番目は「来財」。

仮の母――子どもの多い人に頼むこと。仮の母にかんざしを一輪買ってあげる。その上に黒か藍の色の，足が非常に広い，dang の縫わない，開いているままのズボンを作ってあげる。そのズボンを「漏児」と呼んで，それに仮の息子も「漏児」とも呼ばれる。「漏児」だから，生き残り易いと信じているからである。

仮の母をもらうにはもう一つの方法がある。馬蓮草を仮の母にしてもらうことである。その時，赤いリボン二本で馬蓮草を二つに分けて縛る（女の子の髪型のスタイルの一種）。それから線香を立てて，拝む。

＊当時は子どもの死亡率が高い。仮の母もらいは盛んであった。

双　子――双子は好ましくない。特に異性の場合である。諺には「一男一女，家敗人亡」がある。というのは，仲の非常に良かった夫婦が死んだ後，またその仲に未練を残し，この世に生き返ってきた。最も嫌われることである。話者の実家の村（十キロ離れたことろ）では，生まれたばかりの異性の赤ちゃんを，当日の夜に生き埋めにしたそうである。

死んだ赤ちゃんの処理――当時赤ちゃんの死亡率が高かった。棺を使わずに，人の住んでいない所か墓地に埋める。12才以前に死んだ子どもは皆衣服を着せない。そうでないと，あの世に着いたら，自分で服を着ることはできない。

産　婆――長男を生む時に，必ず産婆さんに手袋に使う赤い布を一尺二寸あげる。産婆さんが死んだ後あの世で使うためである。何故かと言うと，赤ちゃんを取り上げることによって手は汚れてしまい，あの世に行ったら，油の鍋に両手を揚げられる。もし赤い手袋を履いたら，その手袋だけ取られてしまい，手は無難となる。

話者の母が一回取り上げたことがある。しかし，もらった赤い布を話者の子供（孫）の兜々（こどもの下着）を作って上げる時に自分のために一尺二寸残すことを忘れた。それで，死にかかった際に，突然座り上がってきて，そばに居る子供は，母親の両手の中指の爪を皆母が自分で咬み落としてしまった。体の両側は血で汚されていた。最初，皆はどういうことか分からなかったが，後に母が人を取り上げたことがあり，その際自分のため赤い布を残していなかったことに思いあたった。

次は特徴と思われるものである。

1．出産における実家の参与が非常に多い。婚家の跡継ぎに対する責任感と娘に対する思いやりからである。（何故中国人が昔から女の子の出産が好ましく思われないことが分かったような気がする）

2．産婆の「赤い手袋」から出産に対する態度の一端が見られる。血穢の意識が強い。
3．生児の死に対する冷淡と異常児に対する嫌悪が目立つ。

二つの村における調査はまだ，まとまったものに成りにくいが，今度の調査を通じて，中国における産育習俗の豊富さを実感した。同時に，中国ではこのような調査の緊急性も感じた。というのは，1950年以降から，思想と実生活において古い習慣・風俗は次第に排除されたために，実際に体験した年よりたちは段々少なくなっていくからである。

新刊紹介

佐々木高明・森島啓子編
『日本文化の起源 ― 民族学と遺伝学の対話 ―』

日本人の日本論好きはよく指摘されるところであるが，なかでも日本人や日本文化の起源への問いは人文系諸学において長らく関心の対象とされてきた。古くは「海上の道」の仮説や騎馬民族征服説，種族文化複合論等があり，近年でも照葉樹林文化論や北方文化との関連性などが注目され，学際的な研究成果に基づく学説が数多く提示されている。この種の研究において中心的な役割を担ってきたのは民族学・考古学・形質人類学などであったが，近年では遺伝学による生物研究が加わることで新たな展開をみせつつある。ここに紹介する書物は，こうした動向を受けて行われた共同研究「人間をとりまく生物複合の歴史的変容」（総合研究大学院大学）の成果をまとめたものであり，表題が示す通り民族学による文化系統に関する知見と現在の遺伝学の成果とを付き合わせて検討することにより新たな文化起源論の提示に向かおうとするものである。内容としては，冒頭に編者による民族学・遺伝学双方の立場からの概説「日本文化の起源を考える」（佐々木高明）・「遺伝学と系統論」（森島啓子）を掲げ，第1章「日本人はどこから来たか」（寶来聡），第2章「日本の家畜たち」（野澤謙・田名辺雄一），第3章「マウスからみた日本人の起源」（米川博通・森脇和郎），第4章「遺伝学からみた稲の伝来と稲作文化の受容」（佐藤洋一郎），第5章「雑穀とモチの民族植物学」（阪本寧郎）第6章「大豆醗酵食品の起源」（吉田集而）などの論稿から構成され，さらに各章末に課題別の討論を配し，最後に総合討論「民族学と遺伝学の対話」を付している。そこでは，さまざまな素材を通してヒトの移動と随伴生物のドメスティケーション（栽培化・家畜化）に伴う生物変異の多様化や，これらの生物複合に基づく文化的特徴のクラスター等をめぐる問題が論じられており，日本に限らず広くアジアにおけるヒトと文化の移動・形成に関心のある者にとって読みごたえのある内容を備えている。（萩原　左人）

A5版 305頁　講談社　1993年刊